

北里環境科学センター  
名誉顧問／宇宙生命哲学者

伊藤 俊洋

スーパーオペラ「紅天女」が伝えるもの

地球上の生命現象を単純化すると、植物が生産する栄養素を動物が利用する構図になる。動物は、植物が合成した栄養素を使って生命を維持しているいわば植物のパラサイト（寄生生物）のような存在である。植物は、地球上で芽を出すと、生涯その場にどっしりと構え、動くことはなく、高度な知性を持った哲学者のように振る舞う。動物界の頂点に立つ人類は、パラサイトの宿命として、常に不安にかられ、生活に満足することがなく、動き回り、争い合い、怯えている。

久しぶりにスケールの大きなオペラを観た。スーパーオペラ「紅天女」である。物語は、日本が国を二分して抗争した14世紀中期の南北朝期を時

代背景として、人心の乱れ、自然災害を鎮めるために、仏師・一真が、樹齢千年の梅の木から天女像を彫り出す物語である。特命を受けた一真は、旅先で谷底に落ち、記憶をなくす。一真は、精霊界に君臨する紅天女の命を受けて人間界で活動する阿古夜（巫女）と恋に落ちる。南北朝間の戦乱、精霊界と人間界の確執などが盛り込まれて、

歌劇「紅天女」  
公演プログラム

ドラマは現代社会の混乱をも彷彿させる。自然環境を象徴する樹齢千年の梅の老木に宿る紅天女が世の中の騒乱を沈めるくだりに、宇宙生命哲学との共通項が、かい間見える。人間が意識する精霊の世界は、自然環境そのものであり、その自然環境の原点は植物の生きる姿にある。作者美内すずえ氏は、自然環境の大切さを、「紅天女」の中で見

事に描き切っている。

「紅天女」は、日本が誇るサブカルチャーの代表作である少女漫画「ガラスの仮面」の作中劇を、日本オペラ協会が総力を挙げて、オペラ化したものである。今回の5回の公演は、渋谷のオーチャードホールが会場で、基本的にダブルキャストで演じられた。ガラスの仮面は、雑誌掲載から既に44年が経過し、現在も物語は継続中である。少女時代の愛読者も既に熟年となり、会場は幅広い年代で連日ほぼ満席となった。筆者は、初回の舞台（1月11日）を観た。精霊界に君臨する荘厳な紅天女と可憐な阿古夜を見事に演じ分けた小林沙羅氏（ソプラノ）、純真な仏師・一真を演じた山本康寛氏（テノール）の名演技もさることながら、筆者は、夫や息子を戦地に送り出した伊賀の局を演じた丹呉由利子氏（メゾ・ソプラノ）の悲しみのアリア（第3幕）に深い感動を覚えた。

「紅天女」は、日本オペラ界にとって歴史的な出来事であると思う。